

ハンガリーの国民スポーツ

盛田 常夫

サッカーの凋落、水球の復活

ハンガリーの国民スポーツと問われると、サッカーと答える人が多い。1964年東京五輪での優勝、1968年メキシコ五輪での準決勝で日本を破っての連続優勝は、強烈な印象を与えている。ワールドカップのフランス大会(1938年)とスイス大会(1954年)で準優勝、ヘルシンキ五輪でも優勝(1952年)を果たし、この時代の代表チームは「伝説の黄金チーム」として語り継がれている。しかし、メキシコ以降、ハンガリーサッカーは下り坂の一途を辿り、2001年のFIFAランキングでは70位以下に転落してしまった。今のハンガリーではサッカーが国民スポーツだなどと口幅ったいことを言う人はいない。

サッカーでの鬱憤を晴らしているのは、水球である。ハンガリーの水球は歴史的にも古く、1932年ロスアンゼルス五輪で優勝したのを皮切りに、1936年ベルリン五輪、1952年ヘルシンキ五輪、1956年メルボルン五輪、1964年東京五輪、1976年モントリオール五輪を制した。その後、長い低迷時代が続いたが、2000年のシドニー五輪では再び金メダルを獲得し、強豪復活をアピールした。2001年の欧州選手権はブダペストで開催され、女子が優勝、男子が三位。就学前から水球スクールがあり、子供たちにも人気は高い。

ハンガリーは海に面していないが、全土に温泉が出る環境を利用して、各地に温泉プールが設置され、一年を通して利用できる。1896年の第一回アテネ五輪でハンガリーは二個の金メダルを獲得したが、ハヨーシュ・アルフレッドが競泳種目で獲得したものだ。ブダペストを流れるドナウ河の中の島、マルギット島にある競泳プールはハヨーシュ記念プールで、国際競技が開かれる。もっとも、ハヨーシュ以後、競泳種目での金メダルは散発的に獲得しているだけで、水球ほどに強烈な成績はない。しかし、1980年代から1990年代にかけてスーパースターが登場した。女子背泳ぎのエゲルセギ・クリスティーナは1988年ソウル五輪、1992年バルセロナ五輪、1996年アトランタ五輪で、200米背泳ぎの五輪三連勝の快挙を成し遂げた。1988年は14歳での史上最年少優勝であったが、1992年に岩崎恭子がこの年少記録を破った。バルセロナでは、100米背泳ぎと400米個人メドレーでも金メダルを獲得した。男子の個人メドレーも強く、ソウルとバルセロナでダルニィ・タマーシュが400米個人メドレーを連覇し、バルセロナでは200米個人メドレーでも優勝している。アトランタではツェネ・アッティラが200米個人メドレーを制し、ハンガリーの伝統を守った。また、ソウル五輪からアトランタ五輪まで、男子の平泳ぎはサボー、ロージャ、ギュトラーが活躍し、金2個銀3個を獲得している。女子平泳ぎでは、アトランタ五輪200米銅メダルのコヴァチ・アーグネシュが、シドニーで見事金メダルを獲得したが、シドニー五輪の競泳メダルはこの1個だけにとどまった。

伝統スポーツ

ハンガリー民族の伝統と風土を反映して、ハンガリーが強いスポーツ種目の多くは日本に馴染みがなく、ハンガリー選手の活躍が目立った印象がない。しかし、思いがけない種

目でハンガリーは世界水準にある。

一千万の人口のため競技人口は少なく、すべての競技でメダルを量産することはできないが、個別競技種目でこまめにメダルを稼いでいる。2001年カナダ・エドモントンの世界陸上選手権ハンマー投げで室伏広治選手の銀メダルは記憶に新しいが、決勝進出12名のうち、ハンガリー選手が3名いた。そのうちの1人であるキシュは、アトランタの金メダリストである。ハンガリーの実況中継では、3.5人のハンガリー人が決勝に残ったと伝えていた。追加の0.5人目は室伏である。室伏の母はハンガリー系ルーマニア人で、ハンガリーではこれを半分として計算したのだ。そういえば、女子中距離の第一人者ルーマニアのサボー・ガブリエラは名前から見て、ハンガリー人であろう。

五輪陸上競技のメダルは多くないが、ヘルシンキ五輪の男子ハンマー投げ、メキシコ五輪の女子槍投げ、モントリオール五輪の男子槍投げで金メダルをとっている。2001年の男子槍投げの世界チャンピオンはチェコ、男子ハンマー投げの世界チャンピオンはポーランドで、なぜか中欧地域が投擲競技に強い。第二回のパリ五輪(1900年)でハンガリーが獲得した唯一の金メダルは男子円盤投げだった。

水球と並んで伝統的に世界水準にあるのは、フェンシングである。すでに1908年のロンドン五輪では男子サーベル団体が優勝し、1912年ストックホルム五輪も連覇している。以後、この種目は1928年アムステルダム五輪、1932年ロスアンジェルス五輪、1936年ベルリン五輪、1952年ヘルシンキ五輪、1960年ローマ五輪、1988年ソウル五輪を制している。他のフェンシング種目でもメダルをとっており、男子エペ団体は東京五輪から3連覇を達成している。東京五輪では女子フルーレ団体も金メダルを取った。第二次世界大戦前のハンガリーでは、文武両道の紳士の条件としてフェンシングの心得があり、各地にフェンシングチームが存在した。

ハンガリー人の祖先は騎馬民族であり、現在でも馬の飼育の伝統は生きている。乗馬、水泳、フェンシング、ピストル、クロスカントリーで争う近代五種競技は、その民族環境からハンガリーが得意とする種目である。近代五種団体は1952年のヘルシンキ五輪から採用されたが、ハンガリーは最初の金メダルを獲得し、以後ローマ五輪、メキシコ五輪、ソウル五輪を制した。また、1912年から採用された近代五種個人では、これまで四度にわたって金メダルを獲得している。

体操競技も伝統があり、1912年のストックホルム五輪で男子団体が銀メダル、1948年のロンドン五輪と1980年のモスクワ五輪で銅メダルを獲得している。女子団体は1948年のロンドン五輪から三大会連続銀メダルで、ベルリン五輪、メルボルン五輪、ミュンヘン五輪で銅メダルを獲得している。個人種目の金メダルも多く、「鞍馬のマジャール」として日本でも良く知られたマジャール・ゾルタンはモントリオール五輪とモスクワ五輪の鞍馬を制した。近年では、バルセロナ五輪でオノディ・ヘンリエッタが女子跳馬で、シドニー五輪ではチョラーニィ・スィルヴェスターが男子吊り輪で金メダルを獲得している。

五輪種目に採用されて歴史が浅いカヌー・カヤック競技で、近年のハンガリーは五輪と世界選手権を通して、メダルを量産している。シドニー五輪でも、五輪終了間際に行われたカヌー・カヤックで4個の金メダルを獲得し、金メダルを一挙に倍増して五輪を終えた。

これまで、水球とサッカー以外のボールゲームでめばしい活躍はないが、シドニー五輪では女子ハンドボールが銀メダルを獲得している。

格闘競技の異色選手

スラブやゲルマンに比べ、アジア系のマジヤール人の体格は小柄で日本人に近い。にもかかわらず、意外に格闘競技に強い。柔道の競技人口は少ないが、強豪が育つ伝統があり、日本人選手に立ちはだかるハンガリー選手が常に存在する。バルセロナ五輪 71 キロ級の古賀稔彦選手と決勝を戦ったハイトシュは判定で負けたが、鼻肩目に見ても古賀の劣勢は否めなかった。同じくバルセロナ五輪の 95 キロ級ではコヴァチ・アンタルが優勝している。今年の世界選手権でも 100 キロ級で優勝した井上康生選手の決勝の相手は古豪コヴァチで、井上の勝利で対戦成績は五分となった。競技人口は多くないが、常に強豪を生み出す伝統をもっている。柔道と同様に、レスリングも競技人口は少ないが、これまで数個の金メダルを獲得している。

やや異色なのはボクシングである。これも競技人口が多いとはとても言えないが、これまでの五輪競技を通して、8 個の金メダルを獲得している。とくにアトランタ五輪の 54 キロ級で優勝したコヴァチ・イシュトヴァーンはプロに転向し、2000 年暮れに WBO フェザー級世界タイトルを取り、プロアマを通して無敗の王者として、ココ (KoKo) と愛称されるハンガリーの英雄になった。2001 年の第一回防衛戦で初めて敗戦を味わい、ハンガリースポーツ界の話題を提供している。

テニスはチェコが本場だが、ユーゴスラビア国籍でデビューしたセレシュ・モニカはハンガリー人である。ヴォイヴォジナ自治州ノビサド出身で、ハンガリー語を母語とする。

五輪の記録

現在のハンガリー領には山岳地帯がなく、スキーなどの冬季五輪のスポーツを楽しむ施設はない。わずかに冬場にアイススケート場が開設され、小規模なアイスホッケーリーグが存在するだけである。これまで、冬季五輪では銀メダル 2 個、銅メダル 4 個を獲得しているが、いずれもアイスダンス、ペアのメダルで、1980 年のレークプラシッド五輪以降、冬季五輪のメダル獲得はない。

1896 年の第一回アテネ五輪から 2000 年のシドニー五輪まで、夏のオリンピックでハンガリーが獲得した金メダルの総数は 149 個、銀メダル 131 個、銅メダル 153 個で、すべて合わせて 433 個のメダルを獲得している。夏季五輪のメダル順位で見ると、ハンガリーは世界第 7 位で、東ドイツを除くと第 6 位ということになる。上からアメリカ、ソ連 (ロシア)、英国、フランス、東ドイツ、西ドイツ (ドイツ) の大国が並んでおり、人口 1 人当たりのメダル率 (金メダル率) は世界一である。

冬季と夏季の二つの五輪メダルを合わせると、イタリアとスウェーデンがハンガリーを追い越し、フィンランドが迫るという順位になる。フィンランドの次がノルウェーで、その次に日本が来る。しかし、日本の金メダル総数とハンガリーのそれでは 50 個ほどの差があり、日本がこの差を埋めるのは並大抵ではない。

ハンガリーは小さなスポーツ大国だといえよう。

参考文献：ハンガリーサッカー協会のホームページは、www.NB1.hu。ハンガリー代表の百年のゲーム結果を見ることができる。英語で読むことが可能。

ハンガリー選手の五輪記録は、*Olimpiai Almanach – Sydney · 2000*, Tarsoly Kiado, 2000, Budapest.